

県立浮羽高等学校体育館改築移設工事関係埋蔵文化財調査報告

竹重遺跡

福岡県文化財調査報告書

第147集

2000

福岡県教育委員会

序

本書は、教育庁施設課の執行委任を受け、県立浮羽高等学校体育館改築移設工事に先だって実施した浮羽郡吉井町所在遺跡の発掘調査の記録であります。今回の調査では縄文時代の土坑や古墳時代の掘立柱建物跡等が確認され、多くの成果を上げることができました。今回の調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「竹重遺跡」内ですが、過去に土師器の甕が出土していることから、古墳時代～奈良時代を中心とした遺跡ではないかと考えられていました。縄文時代前期の遺構が吉井町内で発掘されることは極めて珍しいことです。町内では縄文時代全期にわたって遺物の存在が確認され、周知の遺跡である法華原遺跡があり、また町内各所で縄文時代後～晩期の遺物は採集されていますが、縄文時代前期の遺物が出土することは少なく、当該期に関する物質文化の広がりや当地に確認できたことは大きな成果であると認識しております。本書によって地域史の研究や文化財保護思想の普及の一助となれば幸甚に存じます。末尾ながら、今回の発掘調査および報告書作成にあたってご協力いただいた関係各位に感謝いたします。

平成12年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

例言

- 1 本書は平成10年度に福岡県教育委員会が福岡県教育庁施設課から執行委任を受けて実施した県立浮羽高等学校体育館改築移設工事に係る埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2 本書に掲載した遺跡は福岡県浮羽郡吉井町生葉に所在する竹重遺跡である。
- 3 本書に掲載した遺構写真は文化財保護課主任技師 森井啓次が、遺物写真は文化財保護課整理指導委員 北岡伸一が撮影し、空中写真は(有)空中写真企画に委託し、バルーンによる撮影を行った。
- 4 本書に掲載した遺構図は森井が実測し、緒方智恵子・芹田治代・田本頼子の協力を得た。
- 5 出土遺物の整理・復元は岩瀬正信の指導のもと、九州歴史資料館で行った。また、鉄器の保存処理は九州歴史資料館学芸第二課の横田義章課長にお願した。
- 6 出土遺物の実測は森井が行った。
- 7 遺構・遺物の製図等は豊福弥生・原カヨ子・森井が行った。
- 8 本書の執筆・編集は森井が行った。

凡例

遺構は検出段階で種類別に通し番号を付け、その頭に分類を付けたが、調査の進展・整理段階で必ずしも分類通りでないことが判明した遺構があるが、遺物の整理段階では現場での取り上げ番号通りの注記作業を行っているため、本書では基本的にそのままの記号を用いている。しかし、掘立柱建物に関する遺構は当初独立する土坑として番号を付したが、本書では以下のように改める。

土坑3→掘P1 土坑4→掘P2 土坑5→掘P3 土坑6→掘P4 土坑16・17→掘P5
したがって一部の土坑など欠番が生じている。

本文目次

I はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
II 位置と環境	4
1. 遺跡の位置	4
2. 歴史的環境	4
III 調査の概要	7
1. 縄文時代の遺構と遺物	9
2. 古墳時代以降の遺構と遺物	18
IV おわりに	27
付編 浮羽高校蔵蔵取古墳出土土器について	28

図版目次

図版 1	1 竹重遺跡全景 (1)	2 竹重遺跡全景 (2)	
図版 2	1 竹重遺跡全景 (3) (北東から)	2 体育館 (南から)	
図版 3	1 I 区東半 (北から)	2 I 区中 (北から)	3 I 区中 (北から)
図版 4	1 I 区縄文住居跡 (南から)	2 I 区井戸遺物出土状況	3 I 区 P 1 遺物出土状況
図版 5	1 I 区掘立柱建物跡 (西から)	2 I 区掘立柱建物 P 1	3 I 区掘立柱建物跡 P 5
図版 6	1 II 区全景 (1) (北から)	2 II 区全景 (2) (南から)	
図版 7	1 I 区落ち (北から)	2 II 区土坑 2 (西から)	3 II 区土坑 4 (南西から)
図版 8	縄文土器		
図版 9	出土土器 (1)		
図版 10	出土土器 (2) ・ 出土石製品		

挿図目次

第 1 図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	5
第 2 図	周辺既調査遺跡位置図 (1/10,000)	6
第 3 図	調査区位置図 (1/2,000)	7
第 4 図	遺構配置図 (1/200)	8
第 5 図	住居跡実測図 (1/60)	9
第 6 図	住居内土坑出土遺物実測図 (1/3)	10
第 7 図	I 区土坑 2・7～9・13・14 実測図 (1/60)	11
第 8 図	土坑出土縄文土器実測図 (1/3)	12
第 9 図	縄文土器 (1) 実測図 (1/3)	14
第 10 図	縄文土器 (2) 実測図 (1/3)	16
第 11 図	石製品実測図 (2/3)	17
第 12 図	掘立柱建物跡・柱穴実測図 (1/60・1/30)	19
第 13 図	掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3)	21
第 14 図	井戸・P-1 実測図 (1/40)	22
第 15 図	井戸・P-1 出土遺物実測図 (1/3)	23
第 16 図	II 区土坑 2・4 実測図 (1/60)	24
第 17 図	落ち・包含層出土土器実測図 (1/3)	25
第 18 図	木器・鉄器・ガラス瓶実測図 (1/3・2/3)	26
第 19 図	II 区包含層出土遺物実測図 (1/3)	26
第 20 図	鷹取古墳出土土器実測図 (1/3)	29

I はじめに

1. 調査に至る経過

県立浮羽高等学校は福岡県浮羽郡吉井町生業に所在する。

明治40（1907）年に設立認可され、同41（1908）年、浮羽郡立浮羽高等女学校と称し、授業を実施した。その後統合・分離等を繰り返し、現在に至っている。

現在の体育館（兼講堂）は昭和42（1967）年に完工されており、30年以上の歳月を経て老朽化が著しく、また南北棟であることから採光の状況が良好とは言えない状況であった。

平成10年度各種開発事業の回答が教育庁施設課から提出され、現在の位置から南に約17m離れたテニスコートに東西棟での改築を行うこととなった。体育館を全面改築するために文化財の有無について文化財保護課に照会があった。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（竹重遺跡）であり、調査はされていないものの完形の甕（浮羽高校蔵：現吉井町立歴史民俗資料館で展示）が採集されているなど遺跡の存在が想定されていた。

平成10年6月5日に北筑後教育事務所生涯学習課文化班において確認調査が実施され、遺構の存在が確認された。この報告を受け、当該開発地全面に渡り発掘調査を実施する必要がある旨施設課に回答し、事前協議を行った。用地にはテニスコートや照明施設、植木等があり、これらの移設が終了した後に調査を実施することで協議がまとまり、同年11月5日から本調査を開始した。

2. 調査の経過

調査は前述の通り11月5日から基準点移動等から開始し、11月10日から重機による表土掘削を実施、11月16日より作業員を入れて人力による遺構検出・掘削を行った。

当該地が地形上の傾斜変換線にあたり、当初確認調査により判明していた遺構面が本調査区内で最も高い場所であったため想定したより遙かに多量の土量があり重機掘削に思いの外とまどった。その代わりに遺構密度が想定されたより薄く、人力による掘削は順調に進んだ。

気候は比較的穏やかな日が多く、外作業には適していたが、2月に入り大雪のために道路が凍結し、普段は1時間強で通える所に3時間以上かかったのには閉口した。重機による埋め戻しに影響があり、重機作業には泣かされる現場となった。

2月1日に機材等を撤収し、2月9日に埋め戻しが終了した後調査は終了した。引き続き平成11年に報告書の作成に着手した。

調査体制

発掘調査及び報告書作成に係る関係者は以下の通りである

	平成10年度	平成11年度
教育庁施設課		
課長	岩本 誠	安野 義勝

参事			
兼課長補佐	中原 一憲		
課長補佐	中原 一憲		
課長技術補佐	中村 邦昭	中村 邦昭	
主任主事	宮崎 計二	山本 哲也	

県立浮羽高等学校

校長	古賀 正美	古賀 正美	
事務長	川葛 通隆	杉山 建生	

福岡県教育委員会

総括

	平成10年度	平成11年度
教育長	光安 常喜	光安 常喜
課長	石松 好雄	柳田 康雄
参事	柳田 康雄	井上 裕弘
課長補佐		
兼管理係長	角 伸幸	角 伸幸
参事		
兼課長技術補佐	井上 裕弘	横口 達也
調査第一係長	横口 達也	児玉 真一
調査第二係長	佐々木隆彦	佐々木隆彦
参事補佐	中間 研志	中間 研志

庶務

事務主査	鶴我 哲夫	吉武 祐二
主任主事	田中 利幸	田中 利幸
	佐藤 雅二	佐藤 雅二

調査・報告

確認調査

技術主査	飛野 博文 (北筑後教育事務所)
------	------------------

本調査・報告

主任技師	森井 啓次
技師	森井 啓次

各書類文書番号

本調査に係る関係書類に対する文書番号は以下の通りである。

(確認調査	10北教第392号)
第57条の3	10教文調第4号の567(対10教施第341号)
第98条の2	10教文調第3号の210
埋蔵物発見届	10教文調第6号の12

遺構図について

調査に用いた座標は国土調査法第Ⅱ座標系を用いている。基準となる座標は国勢調査ポイントの成果を利用し、成果については吉井町教育委員会を通じて(株)朝羽測量設計から数値の提供を得た。標高は1級水準点No.2530(28.692m)を利用した。

調査協力者

発掘調査にあたり多くの方々のご協力を頂き、また各方面にわたる便宜を計っていただきました。ここに記し、感謝を申し上げます。

丸林祐彦・江島伸彦(田主丸町教育委員会)・本田岳秋(北野町教育委員会)
平川祐介・江島尚子(吉井町教育委員会)
姫野健太郎(朝倉町教育委員会)・田中史生(枚方市教育委員会)
(株)朝羽測量設計

調査参加者

無事事故もなく現場が終了したのは現場作業に従事された全作業員のお陰です。ここに記して感謝いたします。

調査補助員 林潤也(現人平村教育委員会)・福本寛(現鞍手町教育委員会)
松崎卓郎(現夜須町教育委員会)

現場作業員

(田主丸町) 石井弘子・石橋ヨシ子・大熊澄子・大野マスミ・行徳ハツミ・熊谷秋子・鳥越清子 吉弘エミ子
(北野町) 大石ミサ子・緒方智恵子・才川通子・武田正人・武田美津子・田本頼子・樋口シツカ・堀田シゲ子・溝上昇・溝上典志
(甘木市) 芹田治代
(五十音順)

Ⅱ 位置と環境

1. 遺跡の位置

竹重遺跡は、福岡県浮羽郡吉井町大字生葉、旧小字の草場他にあたり、今回の調査地点は大字生葉658、県立浮羽高等学校の敷地内である。遺跡は耳納山脈から広がる扇状地にあたり、地形的に緩やかに傾斜してゆく地形の変換点に近い位置にある。事実調査区の北西に向かって地形は傾斜し、それらに流れ込んだ土砂と遺物が縄文時代前期・古墳時代前期の遺物包含層を形成している。また、本調査地点より北東へ約80m離れた現在セミナーハウスが建っている地点（第3図参照）は平成8年に北筑後教育事務所において確認調査が実施されているが、調査状況から当地は旧河道と思われる遺構・遺物は確認されていない。

2. 歴史的環境

歴史的環境については、過去多くの報告書が刊行されており、それらに詳しいので本書では竹重遺跡周辺で実施され、既報告済の調査結果による縄文時代・古墳時代について簡単にふれておきたい。

周辺の状況については浮羽郡内を横断するような形で調査が進行している国道210号線浮羽バイパス関連の調査により比較的分明かになりつつある。竹重遺跡周辺で実施された主な調査は表1の通りである（表1・第1・2図）。

いずれも縄文時代後期～晩期の土器が採集されるものの明確な遺構を伴っておらず、また後期をさかのぼる資料の報告はない。ただ本遺跡から南に位置する大字富永水法華原所在の法華原遺跡は縄文時代の各時期にわたる遺物が採集されており、現段階本遺跡の縄文時代前期の遺構や遺物に関しては法華原遺跡を含めた山地との関連を考えるより他はない。しかし、縄文時代後期～晩期にわたる土器に関しては報告例が多く、いずれ明確な遺構も検出されるものと考えられる。月ノ岡古墳周辺の若宮神社境内でほぼ完形の土器が採集されている他、塚堂遺跡や大碓遺跡、鷹取五反田遺跡など比較的筑後川に近い地点や富永正地遺跡など山地に近い地点での出土が報告されている。

古墳時代前期の遺構は多くみられる。そのほとんどは集落遺跡であり墳墓の状況は明かではないが、調査されているものでは三重の濠を巡らせる方墳の生葉1号墳が特筆すべき存在である。

竹重遺跡と最も関連が深い調査に、平成7年に基盤整備事業に伴う発掘調査で吉井町教育委員会が実施した富永正地遺跡がある。本調査地点から南に約100mの地点で実施された調査で、古墳時代前期の竪穴住居跡を中心とした集落跡（五棟が報告されている）が確認された。今回の調査においても古墳時代の遺構・遺物が確認されていることから両者は同一の集落を形成していた可能性が高いと考えられる。

遺構検出面の高さは概ね標高27m前後のようだが、本調査地点における遺構検出面とは1m近い高低差（註1）があり、これからも本調査地点が既に削平を受けていたこともあるが（註2）、地形変換点付近にあることが読みとれる。

また、富永正地遺跡から東へ0.8～1.5km程度離れた地点（富永横枕・吉井殺蘇・吉井大手木遺跡）でも弥生時代終末～古墳時代前期にかけての集落が確認されており、耳納山麓の河岸段丘や扇状地に当該

期の集落が点在する状況が認められる。遺跡の位置から考えれば、これらの古墳時代集落との関わりが強いものと推察される。

(註1) 本調査における古墳時代前期の遺構検出面は概ね標高26m。

(註2) 富永正地遺跡もかなり削平を受けていたようであり、住居跡の遺存状態は悪いようである。

(参考文献)

平川祐介編1990『生業地区遺跡群Ⅰ』吉井町文化財調査報告書 第5集 吉井町教育委員会

飛野博文・水ノ江と同編1994『堺町・大碓遺跡』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集 福岡県教育委員会

平川祐介編1997『富永正地遺跡』吉井町文化財調査報告書 第9集 吉井町教育委員会

水ノ江と同編1998『鷹取五反田遺跡Ⅰ・稲崎A・B遺跡』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第9集 福岡県教育委員会

平川祐介編1998『吉井大乎木遺跡 吉井殺蘇遺跡 吉井横枕遺跡』吉井町文化財調査報告書

第10集 吉井町教育委員会

水ノ江と同編1999『鷹取五反田遺跡Ⅱ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第10集 福岡県教育委員会



A 竹塚遺跡	1 長柄西ノ前遺跡	2 長柄夏井遺跡	3 長柄高嶋遺跡	4 長柄前畑遺跡	5 船越高原A遺跡
6 船越高原B遺跡	7 鷹取五反田遺跡	8 堺町・大碓遺跡	9 生業1号墳	10 生業遺跡	11 富永正地遺跡
12 富永塚内町遺跡	13 富永上橋正遺跡	14 富永下橋正遺跡	15 富永横枕遺跡	16 富永西小原敷町遺跡	17 吉井殺蘇遺跡
18 吉井大乎木遺跡	19 珍敷塚古墳	20 原古墳	21 島船塚古墳	22 古畑古墳	23 法華原遺跡
24 女塚古墳	25 嶋崎遺跡	26 仁東門前遺跡	27 千年賀田遺跡	28 月の岡古墳	29 日の岡古墳
30 千年小森遺跡	31 塚堂古墳	32 塚堂遺跡	33 堂須遺跡		

第1図 周辺遺跡分布図(1/50,000)



第2図 周辺既調査遺跡位置図 (1/10,000)

遺跡名	所在地	調査主体	調査年度	調査面積 (m ²)
A 竹重遺跡	吉井町大字生葉	福岡県教育委員会	平成10年	2,000
1 堺町遺跡	吉井町大字生葉字堺町	福岡県教育委員会	平成2年	10,000
2 大碓遺跡	吉井町大字生葉字大碓	福岡県教育委員会	平成2年	8,800
3 鷹取五反田遺跡	吉井町大字鷹取字五反田	福岡県教育委員会	平成2・5・6年	7,420
4 生葉地区遺跡	吉井町大字生葉字西ノ前他	吉井町教育委員会	昭和62年	7,000
5 生葉1号墳	吉井町大字生葉字道免	吉井町教育委員会	昭和62年	
6 富永正地遺跡	吉井町大字富永字正地	吉井町教育委員会	平成7年	1,960
7 富永柳枕遺跡	吉井町大字富永字柳枕	吉井町教育委員会	平成9年	1,440
8 富永西小屋敷遺跡	吉井町大字富永	吉井町教育委員会		
9 富永上佛正遺跡	吉井町大字富永	吉井町教育委員会		

表1 周辺遺跡の調査

Ⅲ 調査の概要

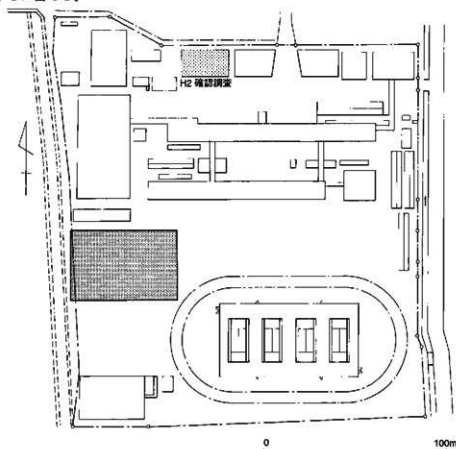
調査区は体育館改築予定地である。調査前はテニスコートとして利用されていたが調査前に移設しており、また周辺フェンスや植木等が移設した段階から調査に入った。しかし、調査区の東の一部を分断するように排水溝があり、調査段階ではまだ利用しているとのことからこの部分の掘削はせず、調査状況をみてこの箇所の対応を考えることとした。調査が進むにつれ、この箇所は攪乱を受けていることが想定されたため調査は行わないこととした。

分断された調査区の西側をⅠ区、東側をⅡ区として調査を行ったが排土の関係などからⅡ区より調査を開始した。

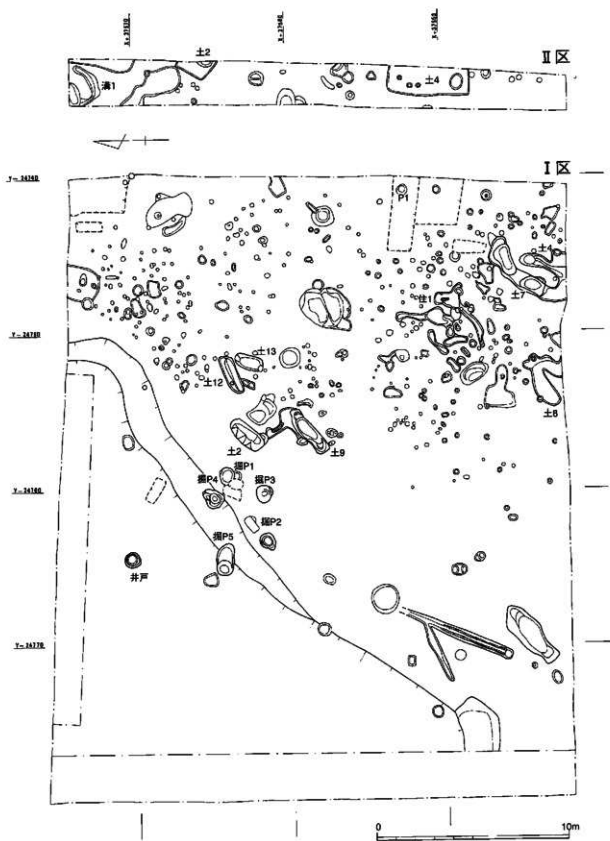
いずれも著しい削平を受けているが地形的に高いⅡ区は特にその状況が激しく、わずかに確認された遺構もその大半が極めて浅い。その中でももっとも北にあたる溝1では1片ながら波状口縁の縄文土器1点(第9図22)が出土し、縄文時代の遺構の存在を窺わせた。

Ⅰ区では黒色砂質粘土を埋土とするピットは多く検出されるものの掘立柱建物としてまとまりをもつものがほとんど認められない。これが削平によるものか、あるいは地形的な問題なのかは明かではない。

なお個別図面は掲載していないが、調査区の北西にある溝は木杭によって作られており、排水施設のようなものである。小さい木杭を打ち込んで横に細長い木で組んでいる。時代的には新しいものと思われる。ここで記述するに留める。



第3図 調査区位置図 (1/2,000)



第4図 遺構配置図 (1/200)

1. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては住居跡と考えられる遺構1基と土坑8基を検出した。

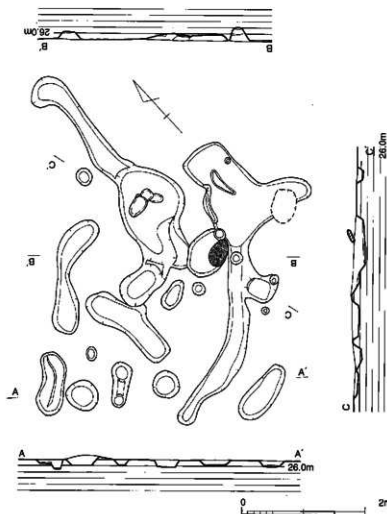
住居跡 (第5図: 図版5-1・2)

I区南端付近で検出した。遺構精査時黒色土と茶褐色砂質土の広がりのみられたものの明確なプランをつかみえなかったが、焼土が見られたことから何らかの生活痕跡である可能性が高いものと考え、古墳時代遺構面より数cm掘削した所、焼土ピットを囲む溝状遺構が弧状に廻る状況が認められた。状況から弧状の溝を周壁溝とし、削平を受けた住居跡と判断した。

規模は南北方向に約4.58mで東西方向に約3.10mを測る。

出土遺物 (第6図)

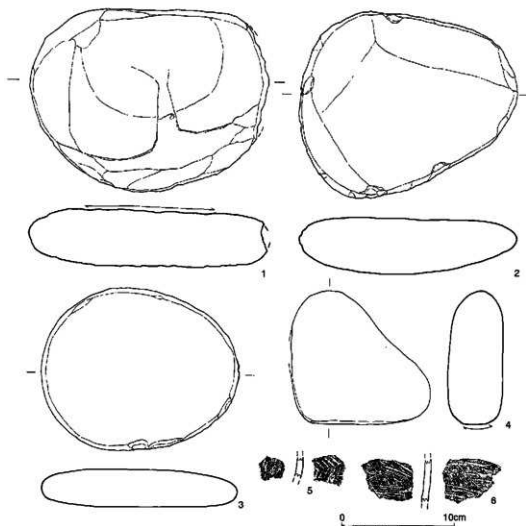
削平を受けていたために遺物は少ない。図化した遺物はすべて同一の層内土坑からの出土である。1～3は石皿、4は磨石と考えられるが何れも風化が著しく、使用痕明確ではない。1は長軸21cmを測る。5・6は何



第5図 住居跡実測図 (1/60)

れも細片であり器形は不明、また表面磨耗しており細部に関して不明である。5は胴部細片である。外面は暗褐色、内面乳白色を呈する。表面は綾杉状の沈線を施し、内面は条痕磨り消し、細砂含み、焼成はやや軟質である。6も胴部細片である。外面は暗赤褐色、貝殻調整すり消し後ななめ方向に沈線文、内面は赤褐色、貝殻条痕残る、細砂少量・2mm程度砂粒多く含む。焼成は極めて良好である。

以上のように出土遺物に古墳時代の遺物が含まれていない、また古墳時代の遺構面より下層で検出したことから本遺構を縄文時代の遺構と判断したが、時期決定を行うに積極的な資料がないために確定的ではないが、埋土と同様の土層から縄文時代前期の遺物が出土していることから、本遺構の時期も縄文時代前期に属する可能性が高いものと考えられる。



第6図 住居内土坑出土遺物 (1/3)

土坑 (第7図)

土坑2は、検出段階では比較的整った楕円の土坑であったが、掘削すると不整形のプランとなった。長軸254cm、短軸134cm、深さ32cmを測る。中から押形文土器を始めとした縄文土器や石器が出土している。

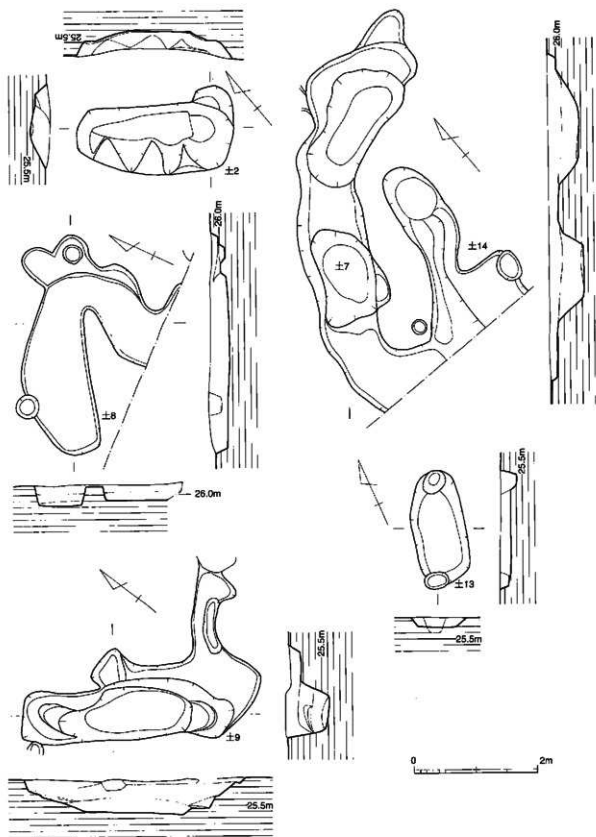
土坑7・14は調査区の南で検出した。不整形の土坑で計測の基準が難しいが、全体を一つの土坑としてとらえると、長軸540cm、短軸252cm、深さ60cm(最深部)を測る。縄文土器細片が出土している。

土坑8は平面U字形を呈する土坑である。長軸362cm、短軸212cm、深さ32cmを測る。

土坑9は南北358cm東西は86～274cm、深さ最深部で54cmを測るL字形の土坑である。

土坑13は小判形をした土坑で長軸194cm、短軸88cm、深さ18cmを測る。検出当初は土坑墓を想定して掘削したが特定できる状態ではない。いずれの土坑も不整形でかつ不定で深さも一定ではなく、機能を特定しがたいが、状況から判断すると風倒木痕跡の可能性が高い。

なお個別図面は掲載していないが、調査区の北西にある溝は木杭によって作られており、導水施設のようなものである。小さい木杭を打ち込んで横に細長い木で組んでいる。時代的には新しいものと思われる、ここで記述するに留める。



第7图 I区土坑2·7~9·13·14实测图(1/60)

出土遺物（第8図）

各土坑からの出土遺物は少量であり、また図化に耐えうる資料は極めて少ない。

1は土坑11からの出土。1は表面が磨耗しているが表面に山形押型文を施している。左半は施されない。外面暗褐色、内面乳白色でナデ消しか、細砂多く、焼成やや軟質。器壁は厚い。土坑11は混入が多く時期判断をしがたい。

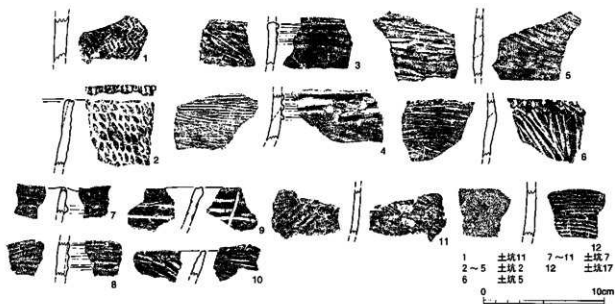
2～5はいずれも土坑2からの出土である。

2は楕円形押型文である。口縁部片で外面乳白色、内面灰白色を呈しナデ消し？胎土は精緻で焼成良好、田村式に相当する。このタイプは本調査においてはこの1点のみしか出土していない。3は胴部片。外面黄橙色で突出度の高い断面台形の隆帯（ほぼ直線）が3条残る。内面は暗茶褐色、貝殻条痕ナデ消し。細砂多く焼成は良好である。4も胴部片。外面暗茶褐色、突出度の高い断面台形の隆帯（ほぼ直線）が3条残る。内面は暗茶褐色、貝殻条痕残る。胎土は細砂含むも精緻で焼成は良好。3・4轟B式に相当。5も胴部片である。外面は灰褐色～黒色、貝殻条痕が残るも一部磨り消し、内面黄橙色～灰褐色で貝殻条痕残る。細砂多く焼成良好。

6は土坑5からの出土。胴部片で外面暗褐色～茶褐色上部に連続する刺突文、縦～ななめ方向の沈線文を施す。内面淡黄褐色、貝殻条痕ナデ消し（不完全）胎土は精緻、焼成良。

7～11は土坑7からの出土である。

7は口縁端部細片。やや波状の口縁である。外面淡い灰色を呈し断面三角の隆帯1条、内面灰褐色、ナデ調整で細砂多く焼成良好。8は胴部細片、外面暗茶褐色でほぼ直線で突出度の低い隆帯が3条、内面茶褐色で条痕ナデ消し、細砂多く粗いが焼成は良好。9は口縁細片。口唇部はほぼ水平で面をなす。外面暗赤褐色、横と縦方向に太い沈線文を施す。内面は赤褐色～灰褐色、横方向の沈線文を施し、細砂多く焼成は良好。10も口縁細片。口縁端部がやや内傾し、口唇部に刺突を施す。淡赤褐色、貝殻条痕磨り消す。内面赤褐色～灰褐色、貝殻条痕が残る、細砂多い。焼成良好。11は胴部片。外面は赤みのある



第8図 土坑出土縄文土器実測図（1/3）

暗褐色～黒色、貝殻条痕摺り消しだが磨耗・剥離が著しい。拓本の孔列文状に見えるものも剥離である。内面黒褐色～灰褐色、貝殻条痕摺り消し、細砂少量、焼成はやや軟質である。

12は土坑17からの出土。胴部細片で外面乳白色、で貝殻条痕が残る。内面黒色、摺り消し、細砂多く焼成良好も磨耗が著しい。形式不明

その他の出土遺物

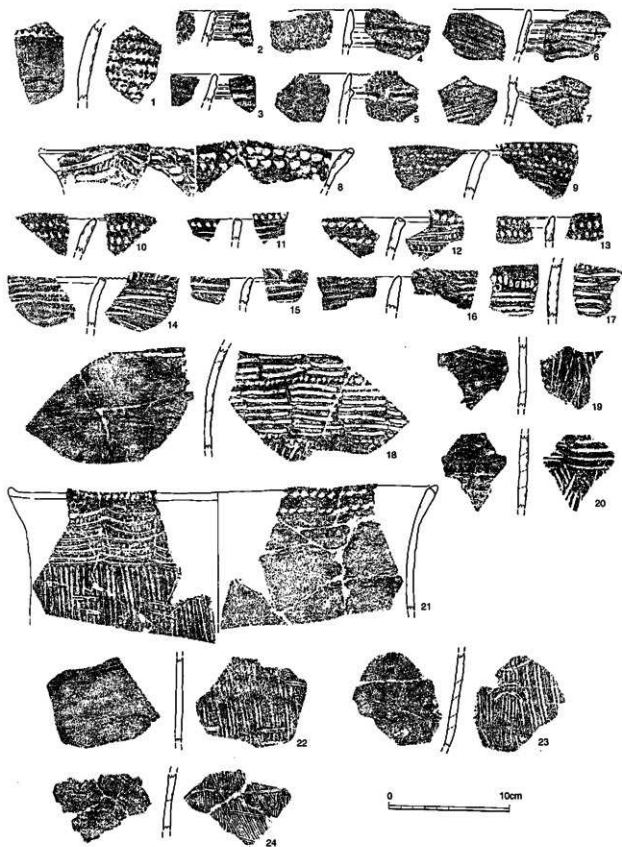
縄文土器（1）（第9図）

1～24すべて落ちからの出土である。

1は胴部片。外面黄褐色、磨耗しており明確ではないが押型文をはっきりとわかる。内面は黄褐色～灰褐色、上部に1条の押型文、ナデで細砂多い、焼成良好。

2は口縁細片、外面乳白色で断面三角に近い隆帯を口唇部付近まで、4条分残る。内面暗褐色、磨耗しており調整不明、細砂多い。3も口縁細片。外面暗褐色、断面三角に近い隆帯2条分残る。内面は淡い暗褐色、斜め方向の条痕が残るが磨耗、細砂含む。4は口縁片と考えたが磨耗しており擬口縁かもしれない。外面黄褐色、断面三角の低い隆帯が2条残り、内面、黄褐色、磨耗して調整不明、細砂多い、軟質である。5は口縁片で口唇部に細かい刻み目を施す。外面は暗褐色、断続的な隆帯で連続しない。内面は黄褐色～黒色、磨耗し調整不明。6も口縁片、外面暗褐色、上2条は直線、下2条は波状の隆帯で計4条分が残る。内面は暗黄褐色、斜め方向条痕摺り消し、細砂多い。天圍3段階に相当。7は胴部片、外面黄褐色で極めて突出度の低い断面三角形の波状の隆帯が1条残り、内面黒色、縦方向条痕が残り砂粒・細砂多い、焼成は良好である。

8は口縁片で数少ない径の復元が可能な個体である。復元口径24cm測る表面暗茶褐色、太い沈線文で文様を施し、内面黄褐色、2条の刺突文を施す。焼成は良。口唇部にも刺突する。9は口縁片。口唇部に刺突文を施す。外面茶褐色、1条の刺突文に太い斜め方向の沈線文、内面暗茶褐色、2条の刺突文と沈線文、細砂含む。焼成良好。10は口縁細片直線的だがやや外反気味に立ち上がる。口唇部に刺突文を施し、外面暗茶褐色で2条の刺突列点文、内面暗茶褐色、2条の刺突文、細砂含む。11は口縁細片でほぼ直立する、口唇部に刺突を施す。外面黄褐色、刺突文・沈線文、内面茶褐色、沈線文、細砂多い。12は口縁細片、やや外反し、口唇部に刺突を施す。外面は暗褐色で沈線文、内面茶褐色、2条の刺突列点文、細砂多い。13は口縁細片。外面、灰白色、2条の刺突列点文を施し、内面灰褐色、刺突文、細砂多い、やや軟質、口唇部刻み目。14は口縁細片で外反して立ち上がる。外面暗灰白色、貝殻条痕、内面暗灰白色、沈線文・ナデ。口唇部刻み目。15は口縁細片、口唇部刻み目。外面茶褐色で平行沈線文、内面茶褐色平行沈線文、細砂多い。16は口縁細片でほぼまっすぐ立ち上がる。口唇部刻み目。外面暗褐色～黄褐色、貝殻条痕ナデ消し、内面灰褐色、貝殻条痕ナデ消し、細砂・砂多い。胎土粗で焼成やや軟である。17は胴部細片、外面暗茶褐色、1条の刺突文と平行沈線文、内面暗茶褐色、1条の刺突文に平行沈線文、細砂多い。焼成良好。18は胴部片。外面暗褐色、刺突文・沈線文、内面暗茶褐色、沈線文、細砂多い。焼成良好。19は胴部片、外面淡黄褐色、斜め方向の沈線文、内面黒色～暗褐色、ナデ消し、細砂含む、焼成良好。20は胴部細片。外面黒褐色、横方向に4条の平行沈線文、下に斜め方向の鋸歯状の沈線文を施し、内面黒褐色、ナデ消し、細砂含む、焼成良好。



第9圖 縄文土器(1) 実測図(1/3)

21は口縁で復元口径17.4cm。ゆるやかに外反し、外面暗褐色、上部は横方向の沈線文、内面は暗褐色、刺突文・条痕ナデ消し、細砂多い、やや軟質、口唇部刺突。22は胴部片で外面暗褐色～黒色、沈線文、暗褐色～黒色、貝殻条痕、細砂多く含む、やや軟質、22～24同一個体であろうか。23、は胴部片。外面暗褐色、沈線文、暗茶褐色、貝殻条痕、細砂多く含む、やや軟質、24も胴部片。外面暗褐色、沈線文、暗茶褐色、貝殻条痕ナデ消し、細砂多く含む、やや軟質である。

縄文土器(2)(第10図)

1～19がⅠ区からの出土である。1～14は落ち、15～19が包含層、20～22がⅡ区からの出土で、20～21は包含層、22は溝出土である。

1は口縁細片、口唇部刻みを施す。外面暗褐色、貝殻条痕、内面暗褐色、貝殻条痕ナデ消し、砂粒含む焼成は良好。2は波状口縁、やや内湾して立ち上がる。口唇部はやや平らになり刻みを施す。外面灰褐色を早し貝殻条痕、内面灰褐色、貝殻条痕ナデ消し、細砂含むも精緻である。3は口縁細片で、直立する。口唇部刻み。外面灰白色、貝殻条痕、内面暗褐色、貝殻条痕ナデ消し、細砂多い、焼成良好。4は口縁、端部が少し内傾し口唇部が広くなり、刻みを施す。外面暗褐色、貝殻条痕、内面暗褐色、貝殻条痕ナデ消し、細砂含むも精緻、焼成やや軟質。5は口縁細片、外面暗茶褐色、貝殻条痕、内面暗茶褐色、貝殻条痕、細砂多いが焼成は良好である。6は口縁、ゆるやかに外反して立ち上がる。口唇部刻み。暗外面褐色、横方向の貝殻条痕、内面暗褐色、横方向の貝殻条痕、細砂含むも精緻、焼成は良好。7は口縁、やや外反気味に立ち上がる。外面黒褐色、斜め方向の貝殻条痕、内面黒褐色、貝殻条痕ナデ消し、細砂含むも精緻、焼成はやや軟質。8は口縁、口唇部刻みを施す。外面灰白色、貝殻条痕、内面暗褐色、貝殻条痕ナデ消し、細砂多い、焼成は良好。9は口縁でほぼ直立、口唇部刺突。淡褐色、貝殻条痕ナデ消し後刺突文、淡黄褐色、貝殻条痕ナデ消し、細砂多い、焼成はやや軟質である。10は胴部片。外面淡黄褐色、貝殻条痕、内面褐色、貝殻条痕、細砂多い、焼成良好。11は胴部片、外面暗茶褐色、貝殻条痕ナデ消し、内面暗茶褐色、貝殻条痕、細砂多い、焼成良好。12は胴部片、外面茶褐色、貝殻条痕、内面茶褐色、貝殻条痕ナデ消し、細砂多い、焼成良好。13は底部片で、今回の調査においてはほとんど底部片は出土していない。外面灰黄褐色、貝殻条痕、内面淡黄褐色、貝殻条痕、細砂多い、焼成良好。14は刻目突帯文土器。外面乳白色、ナデ、内面黒色、ケズリか、砂粒多く含む、焼成良好。

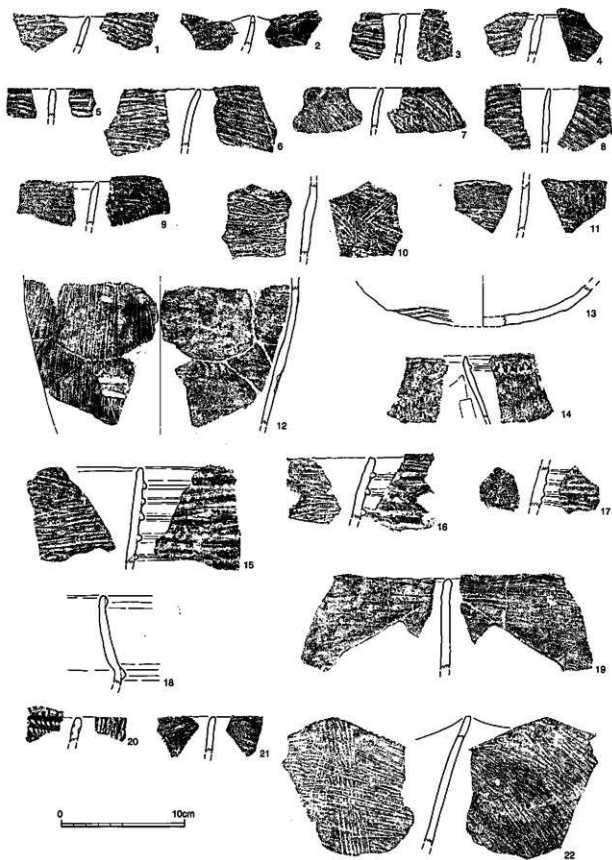
15～17はいずれも遺構検出時に出土。古墳時代検出調査後にグリッドを組んで掘削したがこれらの遺物を伴う遺構は検出できなかった。

15は口縁、黄茶褐色、断面台形の突出度の高い隆帯・直線、灰白色、貝殻条痕、砂粒多く含む、焼成やや軟質。16は口縁、暗褐色～灰白色、断面台形の突出度の高い隆帯・直線、暗褐色、貝殻条痕、砂粒多く含む、焼成はやや軟質。17は胴部片。外面赤茶褐色、断面台形の突出度の低い隆帯・直線、内面黒～茶褐色、貝殻条痕ナデ消し。18は刻目突帯文土器の口縁である。外面は赤みのある黄褐色、ナデ調整、内面は灰黄褐色、ナデ、砂粒少量含む、焼成は良好である。

19は口縁、外面黄灰色、貝殻条痕、内面暗灰色、貝殻条痕、砂粒多く含む、焼成良好。20は口縁、外面明赤褐色、平行沈線、内面明赤褐色、刺突文、砂粒多く含む、焼成良好、口唇部刺突文。21は口縁、外面暗茶褐色、貝殻条痕ナデ消し、内面灰褐色～茶褐色、貝殻条痕、砂粒多く含む、焼成良好。

22はⅡ区北端の溝1(風倒木痕?)からの出土。

22は波状口縁、外面暗褐色、貝殻条痕、内面茶褐色、貝殻条痕、砂粒多く含む、焼成良好。

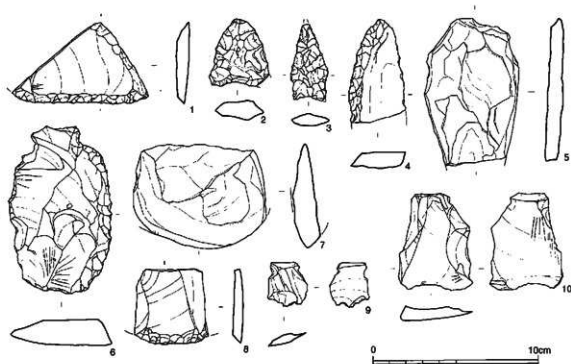


第10圖 縄文土器(2) 実測図(1/3)

石器類 (第11図)

1を除きすべて落ちからの出土である。1は上坑2からの出土。一部を欠損する。サヌカイト製。幅5.5cm、厚さ0.5cm、重さ9.5g。2はいわゆる瑪瑙質石材を使用した無茎鎌である。石質は良好とは言えず白濁しており透明感はない。全体的にシャープさを欠くが材質が原因であろうか。長2.6cm・幅1.9cm・厚さ0.8cm、重さ4.2g。3はチャート製の無茎鎌1.9g。4は6はほぼ完形の石匙。サヌカイト製。長4.1cm・幅2.2cm・厚0.6cm・重さ8.1g。5は片岩製か、長5.9cm・幅3.2cm・厚0.5cm・重さ19.7g。6は石匙、サヌカイト製で、長6.7cm・幅1.0cm・厚さ4.1cm・重さ28.5g。7は石のみ?、サヌカイト8は、石のみ?、サヌカイト、長2.9cm・幅2.9cm・厚さ0.35cm・重さ5.2g。9は瑪瑙質石材の剥片である。やはり白濁しており透明感はない。長3.0cm・幅1.6cm・厚0.5cm・重さ0.9g。他に図化していないが1点瑪瑙質剥片があるがいずれも白濁している。周辺では田主丸町ツプロ遺跡の弥生時代前期の竪穴住居跡からまとまった数の瑪瑙質石器の出土がみられ、比較する必要がある(註)。10は剥片でサヌカイト製、長3.8cm・幅2.9cm・厚さ0.45cm・重さ7.2g。他に未掲載ではあるが数点の黒曜石製石核・剥片等が出土している。

註：田主丸町教育委員会丸林祐彦氏からご教示を頂いた。



第11図 石製品実測図 (2/3)

2. 古墳時代以降の遺構と遺物

古墳時代の遺構もほぼ全面にわたり検出しているが明確な遺構は少ない。主な遺構は掘立柱建物跡1棟、井戸1基、そしてピット多数である。落ちの上層からも多くの遺物が出土している。また時期が確定的ではないが、Ⅱ区で検出した方形の土坑も本節で報告する。また、古墳時代前の遺物も多少含まれているが、書面の都合で本節でとりあげている。

掘立柱建物 (第12図 図版4-1)

落ちにかかる傾斜変換線近くで検出した。当初は掘P5を検出できず独立した土坑と考えていた。1間×1間のプランに掘P1が伴う。掘P1まで建物跡として考えるとプランがいびつになり、掘P1は主柱穴ではなく梯子などの付帯物のピットを想定している。

柱間は掘P2-掘P3が300cm、掘P3-掘P4が314cm、掘P4-掘P5が342cm、掘P5-掘P6が282cmを測り若干いびつなプランとなる。また、堀方の深さも一定ではないが、これは落ちにかかることに関係があるのであろうか。

掘P5では柱基底部が残存していた。柱は径約胴部～底部の40cmを測るが内は完全に腐食しており僅かに外面のみが残るその痕跡を留めている。柱除去後、胴部～底部にかけて半分の変(図13-8 図版9・5)が出土した。鎮壇等の祭祀行為に伴う上層か。高床式の倉庫のような施設が想定される。

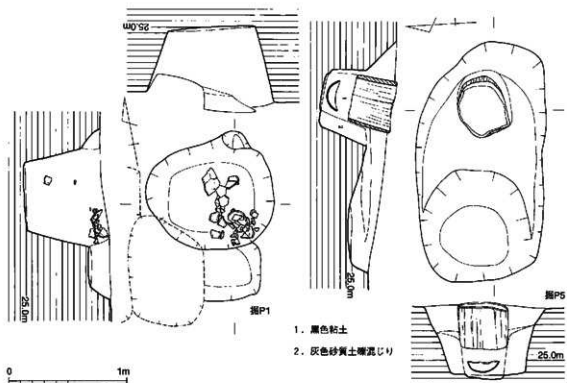
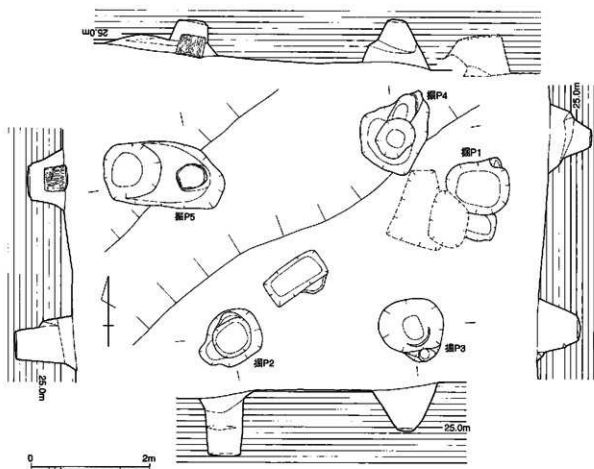
出土遺物 (第13図)

各柱穴からの出土で1～3、4～7は同一の柱穴出土である。図化していない細片も数多くある。

1は土師器の甕。外面は灰褐色～黒色(黒斑)、口縁部はヨコナデ、体部ヨコハケ、内面は灰褐色～黒色(黒斑)、頸部ヨコナデ、胴部ケズリ、砂粒多い。2は土師器甕。約1/4が残存する。復元口径12.2cm、外面黒色～黒灰色、調整は頸部タテハケ、胴部ナナメ方向の粗いハケ。一部ナデですがべったりとつく。内面は黒色～黒灰色、頸部ヨコナデ、胴部ななめ方向のケズリ。3は土師器の壺、約1/2が残存し、復元口径16.2cmを測る。口縁はゆるやかに外反し胴部は最大径が中程よりやや頸部に近いが全体的には球形に近いプロポーションである。外面赤茶褐色で口縁～頸部はタテハケ後ナデ、胴部半位は横からナナメハケ、底部はタテハケ調整。内面は赤茶褐色を呈し、頸部はナデ、胴部はケズリで薄く仕上げている。

4は壺口縁約1/5で、復元口径15.2cm。やや内湾して立ち上がる。外面暗赤褐色～黒色タテハケ後ナデ、内面淡赤褐色でナナメハケ後ナデ。5は土師器の壺口縁で、復元口径14.2cm。外面赤褐色～黒色(すす)でナデ、内面は赤褐色～黒色(すす)でナナメハケ後ナデ。6は小型丸底壺で完形品である。口径5.4cm、高さ6.7cmで外面乳白色～明赤褐色、口縁部ナデ、頸部タテハケ、胴部ヨコ～ナナメハケ、底部ケズリ、内面は明赤褐色で胴部ケズリ。胎土は精緻。焼成はやや軟質。7は小型脚附壺で口縁部は欠損するために器彩は不明。外面灰白色で胴部はヨコハケ、脚部接合部はケズリ、内面灰白色、脚柱部はシボリ痕が残る脚端部はハケメ、胎土は極めて精緻である。

8は甕胴部約1/2で柱直下に埋められていた。現位置を保っており、埋納時から完形ではないこととなる。人為的に打ち欠いた痕跡などは認められない。外面茶褐色で黒斑が残る、胴部はヨコハケ、下半はタテハケで底面はヨコ～ナナメハケ。内面茶褐色～暗褐色でケズリ、底面はオサエ。砂粒少量含むも精緻。



第12図 掘立柱建物跡・柱穴実測図 (1/60・1/30)

9は壺口縁、大きく外反する。外面乳白色、ハケメ後ナデ、内面灰白色、ナデで砂粒多い。

井戸（第14図1：図版4-2）

南北98cm、東西101cm、のほぼ正円形の井戸で深さ182cmで底面付近で2段になっている。底面付近からほぼ完形の土師器壺（図14-5）が出土している他、土師器（図14-6～11）や不明木製品が出土している。

ピット1（第14図2：図版4-3）

おそらくは掘立柱建物の柱穴であろうが、調査範囲外にのびるプランか、もしくは削平により消滅したものは分からない。現時点では掘立柱建物跡として復元できない。

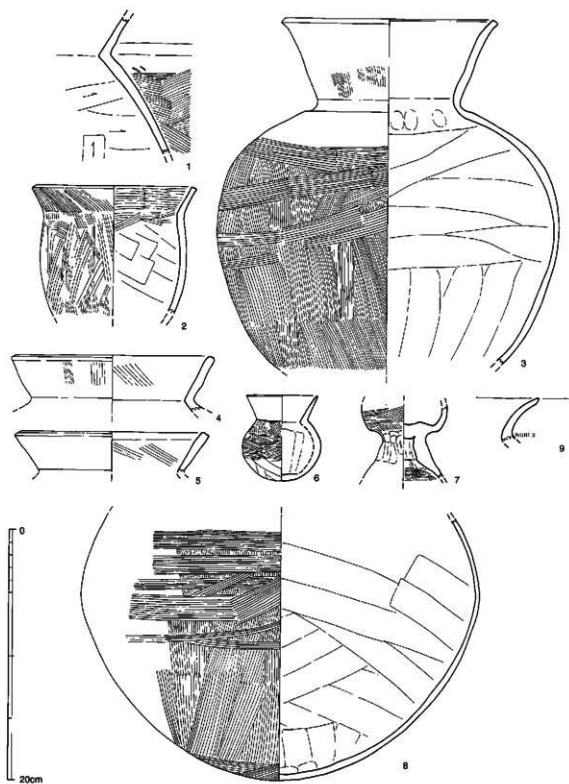
南北69cm、東西72cmのほぼ円形で深さ56cmを測る。中から完形に復元される甕1点（図15-4 図版9-7）と二重口縁壺片（図15-3 図版9-6）などが出土した。

出土遺物（第15図）

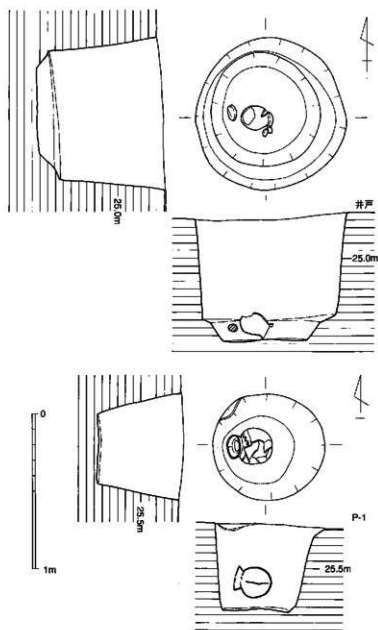
1～4がピット1から、5～11は井戸からの出土である。

1は壺口縁片。摩耗しているが外面乳白色、内面乳白色、砂粒多く含む。混入品であろう。2は壺片約1/4で復元口径19.4cm。大きく外反し、端部をつまみあげる。外面暗茶褐色～黒色（すす）、ナデ、内面は茶褐色、ナデで砂粒含むも精緻、焼成は良。3は二重口縁壺約1/5で復元口径32.0cm、やや外反気味だが直立する口縁。搬入品であろう。外面暗灰白色～黒色、乳白色、砂粒多い、焼成良。4はほぼ完形の甕で口径16.1cm・器高25.3cmを測る。頸部は外反し口縁端部はつまみあげる。やや尖り気味だが丸底。外面茶褐色～黒色（すす）、頸部に波状文を巡らせ、胴部中位までヨコ～ナメハケ、中～下位はタテハケ。内面暗茶褐色～茶褐色、砂粒含むも精緻、焼成良。

5は壺でほぼ完形。口径12.8cm・器高23.6cm。頸部は直線的で体部は卵形、底部は丸底である。外面淡茶褐色にタール分がべったりと吸着し一部は調整も確認できない。肩部は細い単位のタテハケ、中位～下位にかけてタテハケだが肩部とは原体が異なるか。底部付近は不定方向の荒いハケ。内面淡茶褐色にタール分がべったりと吸着する。頸部はナメハケで胴部はケズリ、底部には棒状匠痕が残る。胎土砂粒多く含む、焼成良。6は壺口縁。外反して端部近くでやや内傾し、わずかな段をもつ。外面淡黄褐色で黒斑残る。内面淡黄褐色・黒斑残る。砂粒含むも精緻。7は壺口縁約1/5、復元口径13.2cmを測る。ほぼ直線的で口縁端は丸く仕上げる。外面灰褐色で一部にすすが残り、内面灰褐色、砂粒含むも精緻。8は壺口縁で、復元口径19.0cm。外面暗茶褐色～黒、タテハケ後ヨコナデ、内面暗茶褐色、ヨコハケが顕著に残る。砂粒多く含む、焼成は極めて良い。9は壺口縁、端部わずかに内側に折り返して段をなす。外面灰白色、内面灰白色～乳白色、砂粒多く含む。10は壺口縁片。大きく外反する。外面暗茶褐色、内面暗茶褐色胎土、精緻で焼成良。11は小型丸底壺約1/3、復元口径8.0cmで推定器高8.3cm。外面乳白色～黒斑、頸部はタテハケで口縁端部のみナデ、頸部もタテハケで胴部中位はナデ、下半はヨコハケ。内面は灰白色、頸部はヨコハケ、胴部はナデで下半はナデアゲている。胎土は精緻である。



第13图 掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3)



第14図 井戸・P-1実測図 (1/20)

内面茶褐色で口縁ヨコハケ、胴部はタテハケ、砂粒少量含む、焼成良。3は甕底部約1/4、復元底径4.2cm。外面淡黄白色でタタキ、内面灰褐色、砂粒多い。4は甕底部、底径3.7cm。外面暗茶褐色でタテハケ、内面暗茶褐色、砂粒少量含む。5は甕口縁、くの字状に屈曲する。外面暗灰褐色～黒色、淡内面黄褐色、砂粒多く含むも精緻。6は甕口縁、ゆるやかに外反し端部は内側に折り返し段をなす。外面灰褐色～黒色、内面乳白色。内外面ともナデ。7は甕口縁、くの字状に屈曲し端部つまみあげる。外面淡黄白色、内面乳白色、砂粒多く含むも精緻。8は甕口縁、頸部中半で内傾する。外面淡乳白色、内面淡乳白色、細砂多く含む。9は甕口縁、くの字状に屈曲し端部つまみあげる。外面淡黄白色、内面暗灰褐色、砂粒多く含むも精緻。10は甕口縁、外面暗赤褐色、内面乳白色。内外面ともナデ。11は甕口縁、くの字状に屈曲する。

方形土坑

検出時のプランから竪穴住居跡の可能性が高いと判断して掘削したが、全形は不明で残りが極めて悪く、また遺物もないために遺構の種類も時期も特定しがたい。ここでは土坑として報告するが前述のとおり竪穴住居跡の可能性はある。

1は上坑2である。調査区外に大半がのびるため正確なプランは不明であるが隅丸気味の長方形プランであろうか。計測可能な短辺202cmを測り深さはわずかに4～6cmに過ぎない。

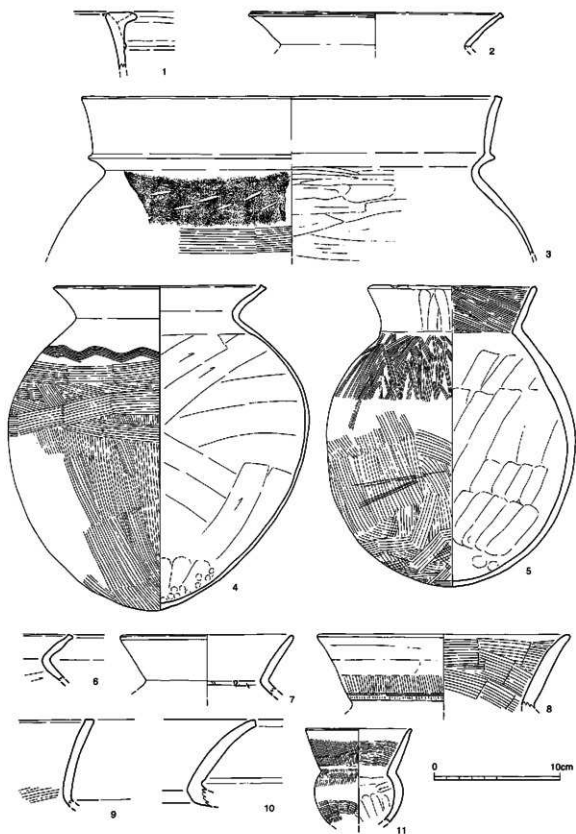
2は土坑4である。2と同じく大半が調査区外にのびるために正確なプランは不明であるが、おそらく長方形プランになろう。計測可能な南北長さは540cmで深さは4～8cm。かなりの削平を受けているものと思われる。

その他の出土遺物 (第17図)

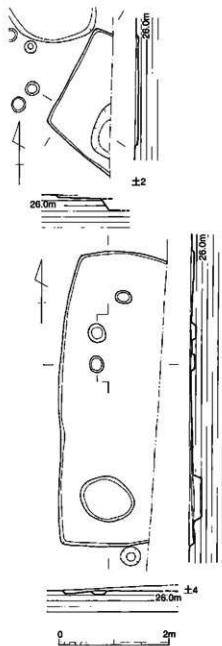
落ちを中心に多くの破片が出土している。ここでは主なものを選択して図化・掲載している。

1～27は落ち、28～34は包含層からの出土である。

1は甕口縁片。外面乳白色で内面乳白色。砂粒少量含む。2は甕口縁約1/4で復元口径19.2cm。外面暗茶褐色、口縁タテハケ後タタキ、胴部はタタキ、



第15图 井戸・P-1出土遺物実測図 (1/3)



第16図 II区土坑2・4実測図(1/60)

粒多い。脚部の形状にやや疑問を感じるが東海系の白付壺の可能性はあるか。27は須恵器高台附杯、外面灰白色、内面灰白色、焼成良。他に数点の須恵器片が出土しているが異物の出土量からすると極めて少ないといえる。

28は壺口縁もしくは器台か。外面暗茶褐色～乳白色、内面乳白色、砂粒多く含むも精緻。29は壺口縁。大きく外反する。外面暗褐色～黒色、内面乳白色、砂粒極めて多い。30は底部片で復元底径8.0cm。外面淡黄白色、内面淡黄白色、砂粒多い。31は壺口縁。ゆるやかに外反する。外面暗赤褐色、内面暗赤褐色、砂粒多い。32は高坏脚部。外面明赤褐色で胎土精緻。33は高坏脚部。外面淡灰褐色で胎土精緻。34は脚部約1/4、復元底径17.6cm。外面黄灰白色黒斑あり、外面タテハケ、内面灰白色脚中部シボリで端部はナデ。

7は壺口縁、くの字状に屈曲し端部つまみあげる。外面淡黄白色、内面乳白色、砂粒多く含むも精緻。8は壺口縁、頸部中半で内傾する。外面淡乳白色、内面淡乳白色、細砂多く含む。

9は壺口縁、くの字状に屈曲し端部つまみあげる。外面淡黄白色、内面暗灰褐色、砂粒多く含むも精緻。10は壺口縁、外面暗赤褐色、内面乳白色。内外面ともナデ。11は壺口縁、くの字状に屈曲する。外面淡黄白色、内面淡黄白色、2～3mm砂粒含む。

12は壺口縁でやや内傾気味に立ち上がる。外面淡赤褐色、内面淡赤褐色、砂粒多く含む。13は壺口縁約1/6で復元口径17.4cm。外面淡黄白色、内面乳白色、砂粒多く含むも精緻。

14は壺口縁、ゆるやかに外反する。外面黄褐色～黒色、内面黄褐色～黒色、砂粒多く含む。15は壺、外面暗赤褐色、内面暗赤褐色、砂粒多く含むも精緻。16は壺口縁で復元口径15.0cm、直線的に立ち上がる。外面暗赤褐色でタテハケ、内面暗赤褐色、ヨコハケ。砂粒多く含む。焼成良好。17は壺口縁で復元口径13.2cm。直線的に立ち上がる。外面淡黄白色、内面淡黄白色、砂粒多く含む。

18は底部で復元底径5.8cm。外面乳白色でユビナデ・オサエ。内面乳白色でユビナデ。砂粒多く含む。19は高坏脚部、外面乳白色。20は高坏脚部、外面淡黄褐色。胎土精緻。21は高坏脚部、外面乳白色。22は高坏、大きく開く杯に短い脚部がつく。外面淡灰白色で杯部ミガキ、脚柱部～脚端部にかけてもミガキである。内面淡灰白色で内面ミガキ胎土、極めて精緻、焼成はやや軟質である。23は小型丸底壺で胴部完形も口縁を欠損する。外面乳白色、内面暗乳白色、胎土精緻。24は二重口縁壺か。復元口径21.2cm。外面灰褐色、内面灰褐色、砂粒多い。25は二重口縁壺で復元口径18.4cm。外面明赤褐色、内面明赤褐色、2mm程度砂粒含む。

26は台附壺で底部径9.4cm、脚高6.2cm。外面淡赤褐色、胴部ヨコハケ、接合部はケズリで脚部タテハケ。内面灰白色、砂

粒多い。脚部の形状にやや疑問を感じるが東海系の白付壺の可能性はあるか。27は須恵器高台附杯、外面灰白色、内面灰白色、焼成良。他に数点の須恵器片が出土しているが異物の出土量からすると極めて少ないといえる。

28は壺口縁もしくは器台か。外面暗茶褐色～乳白色、内面乳白色、砂粒多く含むも精緻。29は壺口縁。大きく外反する。外面暗褐色～黒色、内面乳白色、砂粒極めて多い。30は底部片で復元底径8.0cm。外面淡黄白色、内面淡黄白色、砂粒多い。31は壺口縁。ゆるやかに外反する。外面暗赤褐色、内面暗赤褐色、砂粒多い。32は高坏脚部。外面明赤褐色で胎土精緻。33は高坏脚部。外面淡灰褐色で胎土精緻。34は脚部約1/4、復元底径17.6cm。外面黄灰白色黒斑あり、外面タテハケ、内面灰白色脚中部シボリで端部はナデ。

26は台附壺で底部径9.4cm、脚高6.2cm。外面淡赤褐色、胴部ヨコハケ、接合部はケズリで脚部タテハケ。内面灰白色、砂

粒多い。脚部の形状にやや疑問を感じるが東海系の白付壺の可能性はあるか。27は須恵器高台附杯、外面灰白色、内面灰白色、焼成良。他に数点の須恵器片が出土しているが異物の出土量からすると極めて少ないといえる。

28は壺口縁もしくは器台か。外面暗茶褐色～乳白色、内面乳白色、砂粒多く含むも精緻。29は壺口縁。大きく外反する。外面暗褐色～黒色、内面乳白色、砂粒極めて多い。30は底部片で復元底径8.0cm。外面淡黄白色、内面淡黄白色、砂粒多い。31は壺口縁。ゆるやかに外反する。外面暗赤褐色、内面暗赤褐色、砂粒多い。32は高坏脚部。外面明赤褐色で胎土精緻。33は高坏脚部。外面淡灰褐色で胎土精緻。34は脚部約1/4、復元底径17.6cm。外面黄灰白色黒斑あり、外面タテハケ、内面灰白色脚中部シボリで端部はナデ。

26は台附壺で底部径9.4cm、脚高6.2cm。外面淡赤褐色、胴部ヨコハケ、接合部はケズリで脚部タテハケ。内面灰白色、砂

粒多い。脚部の形状にやや疑問を感じるが東海系の白付壺の可能性はあるか。27は須恵器高台附杯、外面灰白色、内面灰白色、焼成良。他に数点の須恵器片が出土しているが異物の出土量からすると極めて少ないといえる。

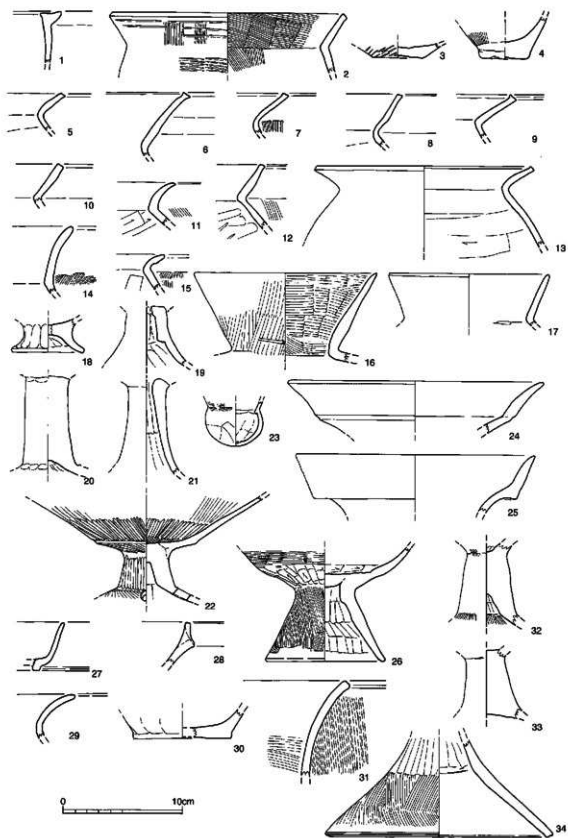
28は壺口縁もしくは器台か。外面暗茶褐色～乳白色、内面乳白色、砂粒多く含むも精緻。29は壺口縁。大きく外反する。外面暗褐色～黒色、内面乳白色、砂粒極めて多い。30は底部片で復元底径8.0cm。外面淡黄白色、内面淡黄白色、砂粒多い。31は壺口縁。ゆるやかに外反する。外面暗赤褐色、内面暗赤褐色、砂粒多い。32は高坏脚部。外面明赤褐色で胎土精緻。33は高坏脚部。外面淡灰褐色で胎土精緻。34は脚部約1/4、復元底径17.6cm。外面黄灰白色黒斑あり、外面タテハケ、内面灰白色脚中部シボリで端部はナデ。

26は台附壺で底部径9.4cm、脚高6.2cm。外面淡赤褐色、胴部ヨコハケ、接合部はケズリで脚部タテハケ。内面灰白色、砂

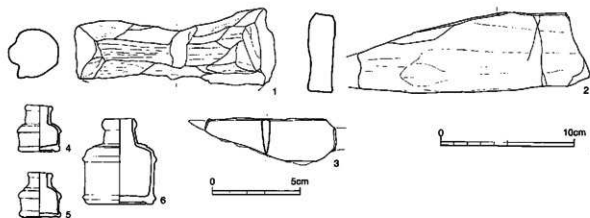
粒多い。脚部の形状にやや疑問を感じるが東海系の白付壺の可能性はあるか。27は須恵器高台附杯、外面灰白色、内面灰白色、焼成良。他に数点の須恵器片が出土しているが異物の出土量からすると極めて少ないといえる。

28は壺口縁もしくは器台か。外面暗茶褐色～乳白色、内面乳白色、砂粒多く含むも精緻。29は壺口縁。大きく外反する。外面暗褐色～黒色、内面乳白色、砂粒極めて多い。30は底部片で復元底径8.0cm。外面淡黄白色、内面淡黄白色、砂粒多い。31は壺口縁。ゆるやかに外反する。外面暗赤褐色、内面暗赤褐色、砂粒多い。32は高坏脚部。外面明赤褐色で胎土精緻。33は高坏脚部。外面淡灰褐色で胎土精緻。34は脚部約1/4、復元底径17.6cm。外面黄灰白色黒斑あり、外面タテハケ、内面灰白色脚中部シボリで端部はナデ。

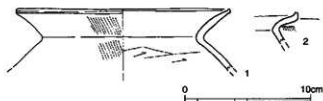
26は台附壺で底部径9.4cm、脚高6.2cm。外面淡赤褐色、胴部ヨコハケ、接合部はケズリで脚部タテハケ。内面灰白色、砂



第17图 落ち・包含層出土土器実測図 (1/3)



第18図 木器・鉄器・ガラス瓶実測図 (1/3・鉄器のみ2/3)



第19図 II区包含層出土遺物実測図 (1/3)

木器・鉄器・ガラス瓶 (第18図)

1は落ち(内のピット)から出土。自然面も多く一部加工して利用している。椀子もしくは糸巻きの類であろう。材は未鑑定のため不明。長14.8cm、幅3.5~4.3cm。2は井戸内からの出土で両端を欠損する。板状に加工されているが何に使用されたかは不明。腐食がすすんでおり遺存状態は悪い。材不明。3は落ちからの出土。刀子のようだが一見新しいようにも見え時期に関しては不明。端部を茶部を欠損する。残存長4.8cm、幅1.5cm厚0.3cm。4~6はすべてインク瓶である。4は口径1.3cm、底径2.5cm、器高3.5cm青緑色透明。5は口径1.2cm、底径3.0cm、器高3.4cm、無色透明。6は口径2.0cm、底径4.8cm、器高6.4cm、無色透明。学校遺跡にはつきもので三井高校や修猷館高校でも多く出土している。ラベルは残らないが底面に浮き彫りでメーカー名等が錆こまれることが多い。それからは多くのバリエーションが存在するが瓶そのものの器形にはあまり変化がみられないのは興味深い。

II区包含層出土遺物 (第19図)

いずれも包含層からの出土である。

1は土師器の口縁約1/5。全体的に外反するが端部はわずかにつまみあげる。復元口径16.8cm。外面淡灰白色で黒斑あり、ハケメ後ナデ(ハケメ残る)、内面淡灰白色、口縁ヨコナデ・内面ケズリ、細砂含むも精緻、焼成良好。2は土師器壺、細片で残りも良くない。外面黒色、ハケメ残る(ナデ消し)、内面明赤褐色、ナデ。表面磨耗。

IV おわりに

遺跡は台地の平坦面から斜面へと移行する地形変換線上に位置し、かつ削平を受けていたために、機能が確定できる遺構としては多くを見い出しうることではできなかった。多数のピットを検出したがまとまりを見いだし得ず、わずかに孤立柱建物跡1棟を復元するにとどまった。しかし、本調査において、わずかではあるが縄文時代前期の遺構と遺物を検出したことは極めて意義が大きいと言える。これまで古井町内では縄文時代後期～晩期に至る遺物は各遺跡で散見され、また法華原遺跡という縄文各時代にわたる遺物が採集される遺跡の存在は知られてはいるものの、発掘調査において縄文時代前期の遺物や遺構が検出されてはいなかった。本調査を契機として縄文時代前期の遺構・遺物の広がりが確認されることが期待される。

また、古墳時代の集落としては富永正地遺跡とのつながりが考えられ、地形的に集落の縁辺部にあたるものと考えられる。これからの周辺調査への手がかりとなりうる。富永正地遺跡は竪穴住居跡からなる集落であり、村の中心となる生活域である。本調査区は井戸や高床倉庫の可能性が考えられる大型掘立柱建物、地形上の落ちなどから集落の縁辺と推測され、村落復元の一助となるであろう。Ⅱ区で検出した土坑2や土坑4は竪穴住居跡の可能性があり、これらが竪穴住居跡であれば現在のテニスコートから南にかけて集落域が存在する可能性がある。町教育委員会の調査で富永地区には多くの集落遺跡が存在していることが確認されており、本遺跡を含め今後の研究の進展が期待できる。ただこれらの集落域に対応した墳墓域が確認されておらず、目立つ墳墓は生葉1号墳のみである。これらも今後の調査事例待ちとなろう。

本調査着手以前には竹重遺跡のありようを示すものは完形の土師器（甗）であり、当然該期の遺構が期待されたが、わずかに数片の須恵器が出土したのみである。しかし、かつては当地にも7～8世紀の遺構が存在していた可能性を示唆し、また周辺には該期の遺構が遺存している可能性を提示した。周辺の調査事例及び報告を待ちたい。

付編 浮羽高校所蔵「鷹取古墳」出土土器について

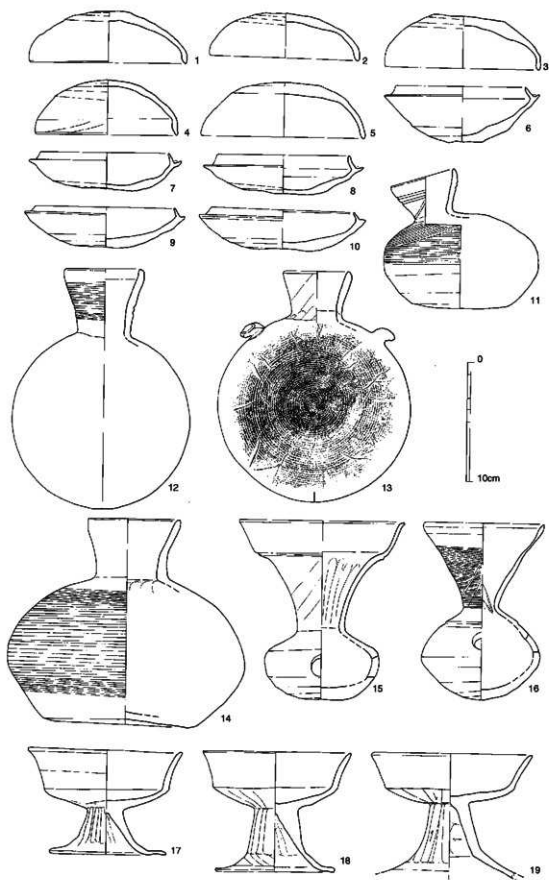
浮羽高校には考古学部が存在し、積極的な活動がなされていた。現在でも校内に資料館を有し、極めて貴重な考古遺物が収蔵・展示されている。また、それらの遺物の一部は現在吉井町立歴史民俗資料館にて展示されている。

本編で紹介する遺物は鷹取古墳出土遺物である。古墳は昭和42年に当時浮羽高校で教鞭をとられていた金子文大先生とともに浮羽高校考古学部において調査がなされたことが記録されている。横穴式石室を内部主体とする古墳であるようだが詳細については不明である。

ここで紹介する遺物はすべて浮羽高校考古学部（資料館）の保管である。これらの遺物はほとんどが完形品であり、また同一遺跡出土としてまとまっているのでここで実測図と計測値を紹介する。

資料の実見には事務長である川島通隆氏にご配慮を頂いた。

- 1、杯蓋、青灰色、径12.8cm、器高4.3cm、ほぼ完形
- 2、杯蓋、赤茶褐色（内）明灰白色、径12.1cm器高3.8cm、ほぼ完形
- 3、杯蓋、青灰色、径12.4～8cm器高4.5cm、ほぼ完形
- 4、杯蓋、青灰色（内）明灰白色、径11.6cm器高4.6cm、約3/4
- 5、杯蓋、淡灰白色、径13.2cm器高4.6cm、ほぼ完形
- 6、杯身、明灰白色、口径10.6cm器高4.7cm、ほぼ完形
- 7、杯身、青灰色、口径10.6cm器高3.1cm、ほぼ完形
- 8、杯身、黄白色、口径10.8cm器高3.3cm、約2/3
- 9、杯身、青灰色、口径11.4cm器高3.4cm、完形
- 10、杯身、暗灰色、口径11.8cm器高3.3cm、完形（接合）
- 11、横瓶、青灰色～明灰白色、口径5.4cm器高11.7cm、完形
- 12、提瓶、青灰色～明灰白色、口径5.8cm器高20.0cm、ほぼ完形
- 13、提瓶、青灰色、口径5.2cm器高19.4cm、完形
- 14、短頸壺、青灰色、口径7.4cm器高17.4cm、ほぼ完形
- 15、甕、灰白色、口径13.4cm器高15.0cm、口縁一部欠損
- 16、甕、黄白色、口径10.0cm器高14.9cm、ほぼ完形
- 17、高坏、淡赤褐色、口径13.0cm器高8.9cm、ほぼ完形
- 18、高坏、淡赤褐色、口径12.2cm器高10.1cm、ほぼ完形
- 19、高坏、淡赤褐色、口径13.2cm残存器高10.0cm、脚端部欠損



第20圖 藤取古墳出土土器実測図 (1/3)



1 竹重遺跡全景 (1)
(後方が富永正地遺跡)



2 竹重遺跡全景 (2)



1 竹重遺跡全景 (3)
(北東から)



2 体育館 (南から)

1 I区東半 (北から)



2 I区中 (北から)

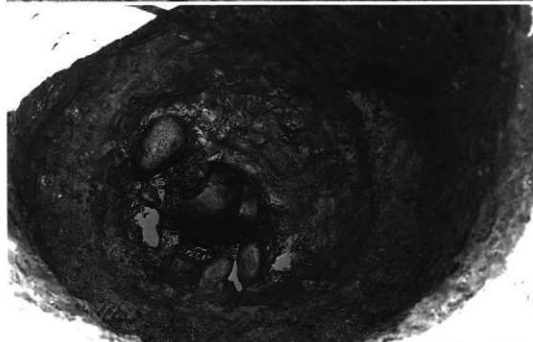


3 I区中 (北から)

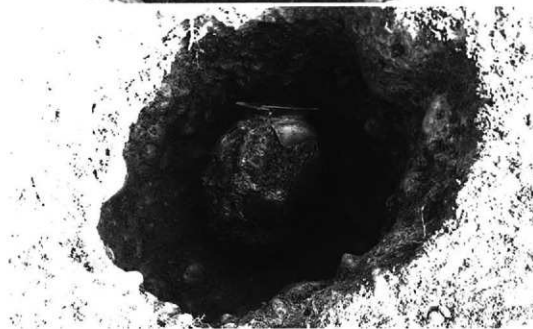




1 I区縄文住居跡
(南から)

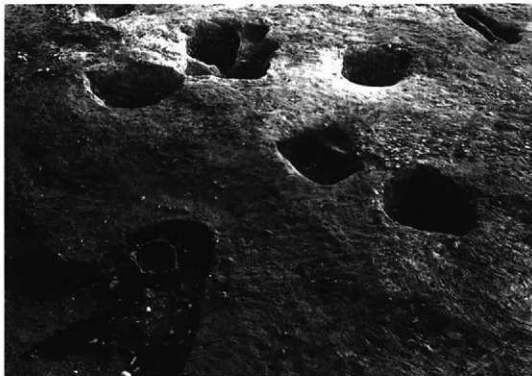


2 I区井戸遺物出土状況



3 I区P1遺物出土状況

1 I区掘立柱建物跡
(西から)



2 I区掘立柱建物跡P1



3 I区掘立柱建物跡P5





1 II区全景 (1) (北から)

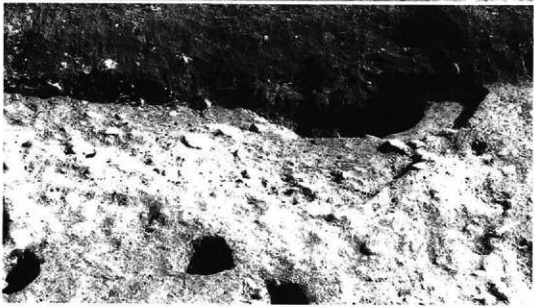


2 II区全景 (2) (南から)

1 I区落ち(北から)



2 II区土坑2(西から)



3 II区土坑4(南西から)





1



7



12



2



8



13



3



14



4



9



15



5



10



16



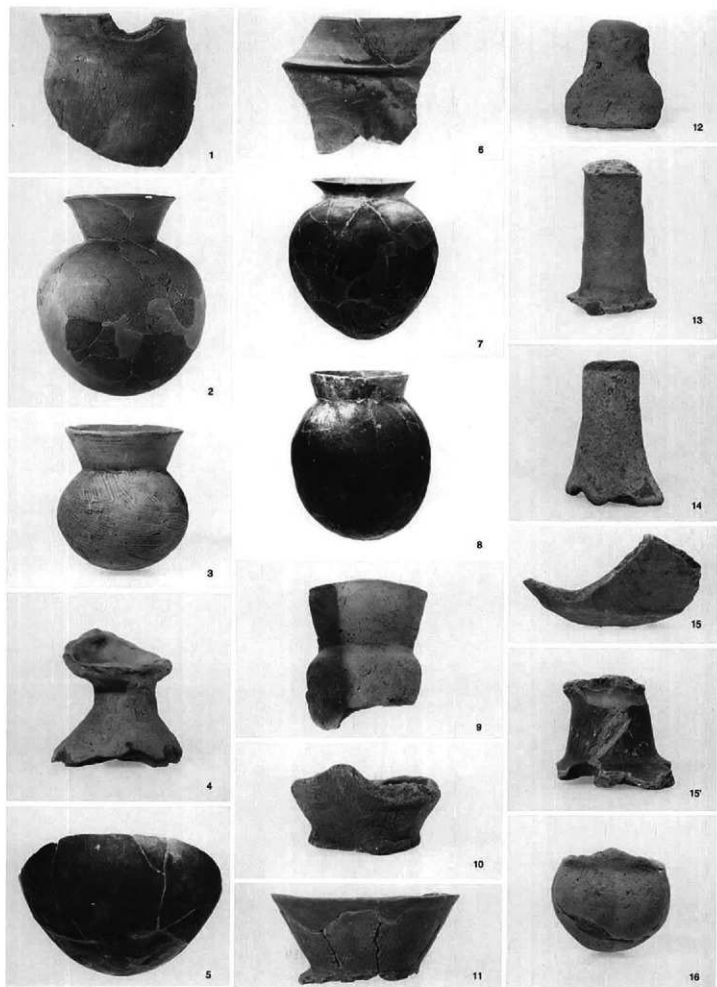
6

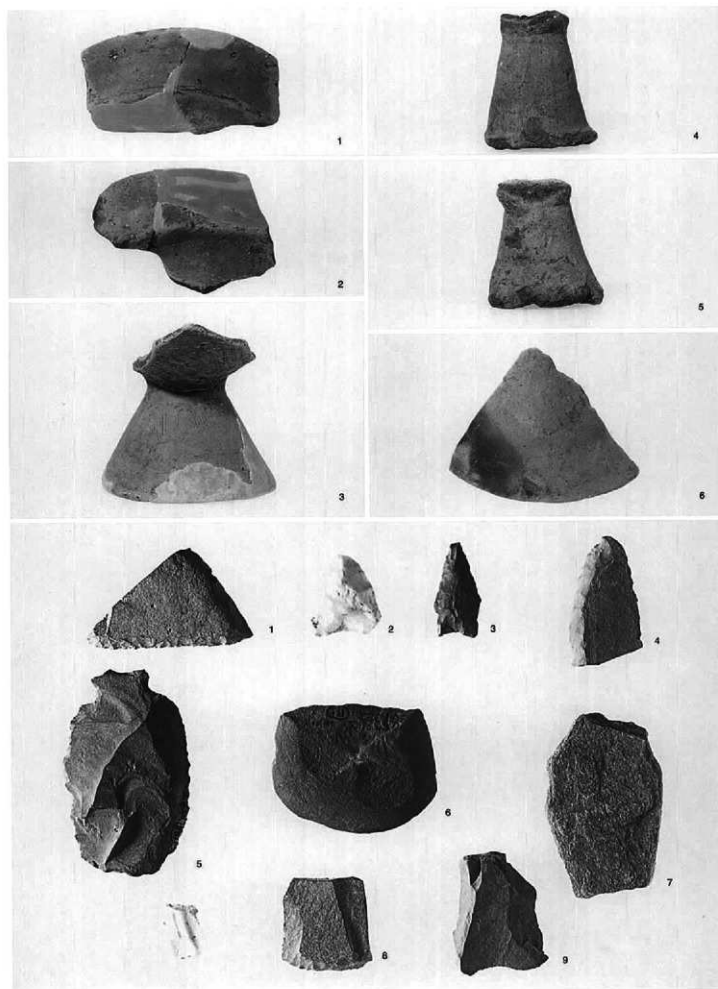


11



17





報 告 書 抄 録

ふりがな	たけしげいせき							
書名	竹重遺跡							
副書名	県立浮羽高等学校体育館改築移設工事関係埋蔵文化財調査報告							
巻次	1							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第147集							
編著者名	森井啓次							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけしげいせき 竹重遺跡	ふくおかけんうきはぐん 福岡県浮羽郡 よしいまちおおあざいくは 吉井町大字生葉	40481	630006	36° 20' 17"	138° 13' 27"	19981105 } 19990209	2,000㎡	学校建設 (県立浮羽 高等学校 体育館改築 移設工事)
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
竹重遺跡	集落	縄文時代 古墳時代	土坑・住居跡 土坑・井戸 掘立柱建物跡		縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器 石器・木器・鉄器			

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 11	登録番号 7

竹重遺跡

福岡県文化財調査報告書 第147集

平成12年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 アド印刷(株)
福岡市博多区博多駅南5丁目21番28号